西二葉町遺跡発掘通信

No. 2
令和６年
６月号

ごあいさつ

愛知県埋蔵文化財センターでは、今年度は西二葉町遺跡のほか、豊山町の青山神明遺跡、清須市の清洲城下町遺跡、安城市の鹿乗川関連遺跡群、豊橋市の野添遺跡・萱野遺跡、設楽町の設楽ダム関連遺跡の合計六ヶ所で二八四二四平方メートルの発掘調査と、名古屋市北区の名城公園遺跡を始め、八遺跡の発掘調査報告書を作成する予定です。

なかでも西二葉町遺跡は、江戸時代の尾張藩附家老である成瀬隼人正の中屋敷であり、その調査成果は発掘前から大いに注目されているところです。

本紙のようにすでに調査成果は少しずつですが上がってきており、**秋頃には最も広い音楽棟の24B区において、地元説明会を予定しておりますので**、愛知県立明和高等学校を始め関係各所の皆様方には、今後ともご支援ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

（調査課課長　樋上　昇）

北校舎北側の調査区（24D 区）で見つかったレンガ積みの建物基礎
（詳しくは４頁をご覧下さい。）

五月実施の発掘調査について

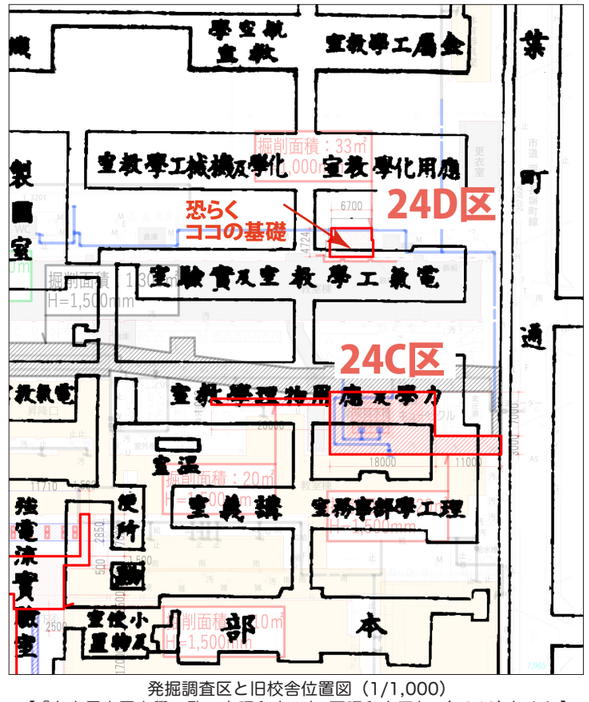
五月十三日から始まった発掘本調査は、まずはじめに北校舎北側の区域から開始しました。本紙二頁上段に示した24Ｄ区とした地点です。次いで、食堂西側に設けられた24 Ae区へと調査は進んでいます。ここでは、24Ｄ区の調査成果についてお知らせします。この場所はかつてあったテニスコートの南側に当たります。

発掘調査では、「上から順番に掘っていく」とよく言われます。ここでも、かつての道のコンクリート舗装を除去すると、レンガが積まれたコンクリート基礎を見つけることができました（一頁下の写真です）。この基礎は、深さ五十センチ掘って、土を入れた上にグリ石を敷き詰め、その上にコンクリートを流し込み、さらにレンガ積みがされているものでした。現状でレンガ積みは三段確認され、その北側にはコンクリートを流し込んで作った側溝も敷設されていました。この基礎は、建物基礎と考えられ、側溝のある北側が建物外側、南側が建物内側に当たります。この基礎について、レンガなどに年代を示す刻印などはありませんが、本紙二頁・三頁で紹介したような土地利用の各種図面を比較検討した結果、愛知一中および名古屋帝国大学で使用されていた校舎の基礎の一部である可能性が高いことが分かりました。当時の校舎の写真を見ますと、コンクリート部分が地表に当たり、レンガ積み部分は地表で目視できる位置にありました。当時の建物は、このレンガ基礎の上に木造の建物が建てられていたようです。調査ではこの建物基礎の根元部分で第二次世界大戦の空襲で焼けた際の焼土塊が見つかりました。陶器片・ガラス片・瓦片を多く含み、空襲の激しさを物語るものとなっていました。

成瀬家家紋のある丸瓦

建物基礎の下には、江戸時代の陶器などを含む堆積層（遺物包含層）が認められました。この堆積層について、形成の様子を詳細に観察した結果、南西から北東方向に向かって、繰り返し土を入れて造成した盛土（整地層）であることが分かりました。江戸後期から幕末頃の陶器片のほか、瓦片が多量に出土しました。この堆積層の下からは、井戸の可能性のある近世の大型土坑と、名古屋台地の古い地形が見つかりました。この整地層は成瀬隼人正中屋敷の整備、あるいは明治初期の屋敷地解体時に形成された可能性が高いのでは考えられます。（川添和暁）

西二葉町遺跡発掘通信
No. 2
令和６年６月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802の24
電話（0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Instagram https://www.instagram.com/aichimaibun/
X https://twitter.com/aich
印刷・協力　安西工業株式会社



発掘調査区と旧校舎位置図（1/1,000）
【『名古屋帝國大學一覧　自昭和十四年 至昭和十五年』（1940）年より】

西二葉町遺跡における土地利用史

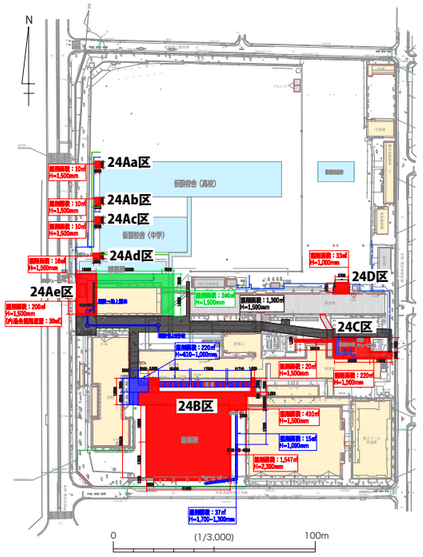
遺跡の発掘調査に入る際には、その土地の成り立ちや歴史に関して、さまざまな情報を収集してから発掘調査（本調査）に臨みます。調査するものとして、①地形図・地勢図、②土地条件図や地質図、③地籍図や土地宝典、④各種絵図面、⑤航空写真などがあります。考古学・埋蔵文化財調査が対象とする内容は、古い時代のものが多いため、これらの記録類も、現代のものだけではなく、できるだけ古い段階に記録されたものをよく参考にします。特に、戦後の高度経済成長期以降、大規模開発による土地改変なされているため、それ以前の記録を参考にすることが多いのです。

今回の発掘調査対象地である明和高等学校の敷地は、名古屋城二の丸の東に隣接した一等地といえます。江戸時代には成瀬隼人正中屋敷であったことに加えて、明治時代以降の土地利用がめまぐるしいのですが、その記録が多く残されています。今回は、明治時代以降の変遷について簡単に見ていきたいと思います。

明治時代以降の土地利用の変遷

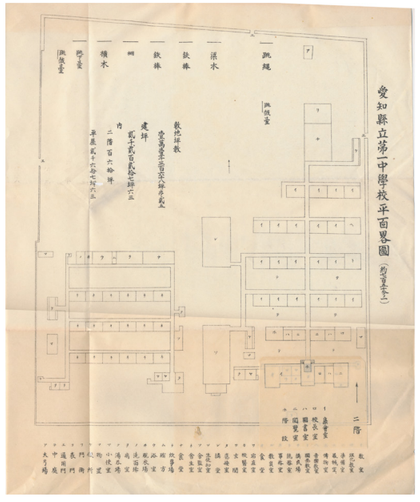
愛知県立第一中学校（現在の旭丘高等学校）創立百年実行委員会による『鯱光百年史』（一九七七年刊行）のほか各学校史などの文献から辿ってみました。

明治八（一八七五）年からは、現在の県農業試験場のもととなった栽培所・農事試験場として使用されていましたが、学校用地となったのは明治三十年代末からで、それまであった陸軍の仮病院の棟を解体して校舎が建てられたといいます。愛知一中の学校校舎全体が完成したのは明治四十三（一九一〇）年です。当時の校舎配置図を、愛知県立第一中学校学友会刊行の機関誌『学林』で見ることができます（二頁下図）。東半分に本部と教室が配されるというのが基本的な配置であったと言えます。ほどなくして舎生室の解体などがあったようですが、東側の建物群はそのままの形であったようです。昭和十四（一九三九）年に名古屋帝国大学の本部・理工学部が設けられたとき、これまでの一中の校舎がそのまま利用されました。大学開校当初は南西区画には校舎はありませんでした（三頁上図）が、昭和一七（一九四二）年になると敷地全面に校舎が建て増しされました。愛知一中以来続いた学校校舎は、昭和二十（一九四五）年五月の名古屋大空襲で、ほぼすべて（一説には四分の三程度）が焼失してしまうこととなりました。



発掘調査前の建物校舎配置と今年度の発掘調査区（1/3.000）

赤塗りで示した範囲が今回の発掘調査区です。調査区は、24Aa 区・24Ab 区・24Ac 区・24Ae 区・24Ae 区・24B 区・24C 区・24D 区と、埋蔵文化財センター側で名前をつけて管理しています。

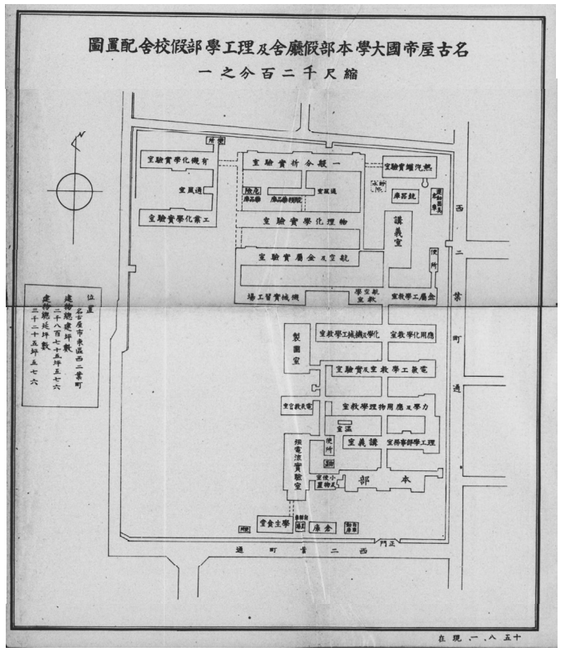


愛知県立第一中学校平面略図（1/3,000）
【『学林 69 号』明治 43（1910）年より】

愛知一中の西二葉町校舎が完成した時の様子を伝える図面です。図左下（南西）区画に、当初は舎生室（学生寮）が設けられていました。大正 10（1921）年頃の学校敷地図を見ると、南西区画にあった宿舎はなくなっており、その代わりに陸上トラック・テニスコート・相撲土俵が整備されました。【『鯱光百年史』（1977）より】

明治時代以降の西二葉町遺跡（明和高等学校敷地内）土地利用変遷表
【『鯱光百年史』（1977）、『愛知縣第一高等女学校史』（1988）、『愛知県立明和高等学校史』（1998）、『東区史』（1973）、『農總試 15 年のあゆみ』（1981）を参考に作成】

和暦年	西暦年	月	事柄	備考
明治初年			成瀬家が西二葉町用地を明治政府に返還	
			大野広景 所有	
明治 8 年	1875	11	愛知県栽培所・薬草園 転入	明治 11 年 植物園と改称
明治 26 年	1893		栽培所を母体として農事試験場を創設	
明治 29 年	1896		農事試験場 現在の清須市寺野に転出	
			日清戦争での陸軍の仮病院	体育会所属
明治 40 年	1907	8	愛知一中校舎 西二葉町に 2 棟 竣工	9 月から授業開始
明治 43 年	1910	1	愛知一中校舎建設 完成	
～大正 10 年			南東区角に陸上トラック・テニスコートなど整備	
昭和 13 年	1938	7	愛知一中 新出来校舎に転出	
昭和 14 年	1939	9	名古屋帝国大学本部 転入	本部設立は 14 年 4 月 愛知県庁内
昭和 15 年	1940	4	名古屋帝国大学理工学部 開設	
昭和 19 年	1944	12	名古屋帝国大学工学部のみ残る	本部と理学部は東山校地へ転出
昭和 20 年	1945	5	名古屋大空襲により焼失	
			北東区画内に住宅地建設	
昭和 22 年	1947	6	愛知県第一高等女学校 西二葉町に 2 棟【木造】竣工	
昭和 23 年	1948	3	第三棟校舎【木造】竣工	
昭和 23 年	1948	4	愛知県立第一女子高等学校 発足	
昭和 23 年	1948	6	愛知県立第一女子高等学校 和楽会館 竣工	
昭和 23 年	1948	10	明倫高等学校との合併により愛知県立明和高等学校 発足	
昭和 23 年	1949	4	全日制普通科・商業科・家庭科、定時制 普通科	
昭和 25 年	1950	4	全日制音楽科新設	
昭和 28 年	1953	5	本館【鉄筋コンクリート 3 階建て】竣工	
昭和 33 年	1958	12 ～	木造校舎第一・二・三棟について、西側渡り廊下 端までの一部分取り壊わし	名古屋市の都市計画による学校用地外西側道路の拡幅による
昭和 34・36・37 年			鉄筋コンクリート新校舎の竣工	
昭和 38 年	1963	2	講堂兼体育館「明和館」竣工	
昭和 38 年	1963	4	新設の愛知県立 T 種高等学校が木造校舎に間借り同居	昭和 39 年 1 月 20 日まで その後に木造校舎の解体
昭和 39 年	1964	6	弓道場 竣工	
昭和 41 年	1966		クラブハウス（7 月）、バレー・テニスの野外コート完成	一時期住宅地となった北東区角 整備
昭和 43 年	1968	7	プールおよび武道場「明光館」竣工	
昭和 46 年	1971	6	新本館校舎 竣工	
昭和 59 年	1984	3	西館音楽棟 竣工	
昭和 60 年	1985	3	前庭整備 工事完成	

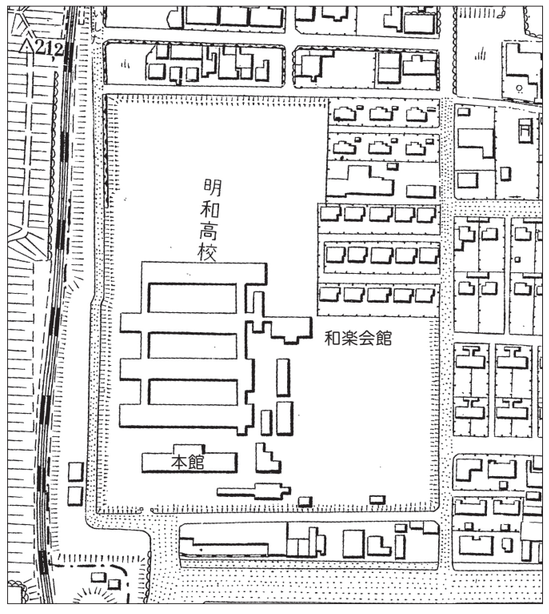


名古屋帝国大学本部および理工学部校舎配置図（1/3,000）
【『名古屋帝國大學一覧　自昭和十四年 至昭和十五年』（1940）年より】

終戦後、更地となった当地には、愛知県第一高等女学校校舎が建設されました。当初は南西区画に木造校舎が二棟建てられたのですが、この時と同時あるいは若干先行して、北東区画には住宅地が新たに設けられました。第一女子高等学校と改名後、すぐに明倫高等学校との併合で明和高等学校が誕生しますが、学校創設時もこの北東区画の住宅用地は存続していました。当地全体が学校用地に戻り整備されたのは昭和四十一（一九六六）年頃のようです。（三頁下図）。昭和二十八（一九五三）年に、これまでの木造校舎の南側に鉄筋コンクリートの本館が建設されて以来、新校舎建設と旧校舎の取り壊しが続くなか、明和館（一九六三）、明光館（一九六八）、西館音楽棟（一九八四）が完成し、前庭部の整理で、昭和六十（一九八五）年頃に、今回の建替工事前の形状になったようです（二頁下表）。

これまでもよく言われているように、当地は愛知県の中等・高等教育史を考える上で、とても重要な場所であることが、あらためて分かります。校舎などの建物配置の変遷を辿ることで、教育・研究機関としてどのように体制が整えられていったのかということを、垣間見ることができるのです。

（川添 和暁）



設立当初の明和高等学校校舎配置図（1/3,000）
【 名古屋市作成 1/3,000 地形図『名古屋城』（1958）より】

第一女子高等学校以来の木造校舎三棟の南側に、鉄筋コンクリート造りの本館が建てられています。敷地中央には和楽会館がありました。